

抄物が生まれる現場（商量を伴う場合）

— 一 東京大学史料編纂所蔵本『人天眼目抄』を例として —

坪井 美樹

キーワード：抄物、聞き書き、商量、中世日本語、口語性

要 旨

抄物資料の口語性を解明することを最終目的として、本稿では、川僧慧済の『人天眼目抄』から商量が加えられる実態例を取り上げ、まず、その『人天眼目』講義の実際を出来るだけ具体的に記述し、もって当時の抄物が成立する現場を再現する。然る後、『人天眼目抄』のような、師家（＝講師）と学人（＝聴聞僧）との「問答」の記録を伴う禅書講義抄物が、仮名抄の口語性の強い文体が形成される基盤の一つとなったのではないかという考えを述べる。

1. はじめに

抄物資料は、中世日本語資料として質・量ともに優れた資料であることは多くの日本語史研究家の認めるところである。特に抄物資料が口語性に富む日本語資料であることも認められている。しかし、それではその抄物資料が日本語史資料として広く研究に利用されているかという点、必ずしも十分ではないように見える。その理由の一つは、

・抄物資料の内容の分かりにくさ

にあると言えるように思う。さらに言えば、その「内容の分かりにくさ」とは、結局、

- ① 抄物資料がある經典・漢籍ないし漢詩文の「（講義・注釈の対象としての）原典」を持つこと。したがって、抄物資料を日本語資料として用いる際にまず「原典」の理解が必要であること。
- ② 抄物資料の記述のしかたが、（講義・注釈の対象としての）原典の文と（講義・注釈そのものの）抄文とが、しばしば（読み手にとって）分かりにくく記述されていること。

の2点に行きつくように思われる。

その抄物資料の分かりにくさ・取っ付きの悪さは、本稿で取り上げる『人天眼目抄』のような禅宗教義書の抄物の場合に最も強く現れると言ってよい。しかし、抄物資料の口語性は、このような禅宗教義書の抄物作成によって育てられたのではないか、というのが本稿で筆者が提示したい考えの一つである。そのことを証するためにも、本稿では、禅宗教義書の抄物である川僧慧濟講『人天眼目抄』を材料としてその講義の現場を具体的に記述・解説してみたいと思うのである。

2. 抄物資料の「分かりにくさ」「取り扱いにくさ」についての議論

抄物資料がその貴重さ・重要さに比して一般の利用が遅れた理由には、上にあげた「内容の分かりにくさ」の他に、個々の抄物資料の成立や伝来の複雑さ、つまり「書誌的な分かりにくさ」があり、日本語資料として抄物資料を利用する際の「取り扱いにくさ」もあったと思われる。また、抄物を利用したこれまでの個別言語事象の研究において、抄物資料の口語資料としての利点と欠点が指摘されながら、「抄物資料の言語の性格」を一般的・普遍的な知見として記述・公開するという努力が必ずしも十分ではなかったこともあるのではないだろうか。

しかし、近年「抄物の文体」やその「口語性」そのものを論ずる研究も大いに進められた。野村剛史は、「抄物」の世界一室町時代の言語生活（『古典日本語の世界 漢字がつくる日本』2007.4）、『話し言葉の日本史』（2011.1）、『日本語スタンダードの歴史 ミヤコ言葉から言文一致まで』（2013.5）と、日本語史全体の流れの中に抄物資料の言語を位置づける仕事を続けている。また、抄物研究の第一人者である柳田征司は、『日本語の歴史3 中世口語資料を読む』（2012.5）、『日本語の歴史4 抄物、広大な沃野』（2013.4）を刊行し、特に後者では正面から抄物資料の口語性を論じている。その中で抄物資料の言語資料としての取扱いにくさについても触れられる場合があり、例えば柳田2013は、抄物の「読みにくさ」について、

・『史記抄』を例に言えば、それが読みづらいのは、原典『史記』の本文を示していないために、読者が抄とは別に原典『史記』を手許に持たないと読めないということから来ている面が大きい。（柳田2013 P.85）

と言う。これはそのとおりで、抄物資料では講義・講釈の対象となる原典の本文を略記ないし省略することが多く、当該の抄物資料だけを言語資料として読んでいく際の理解を妨げる要因となっている。ただし、抄物資料の多くがどうしてそのような体裁をなすかについての柳田2013が述べる理由、

・漢籍の受容は原典を訓読し、その訓点本を作ることにはじまり、その長い歴史を持つのであって、訓点に遅れて生まれて来た注釈活動の成果である抄物がはじめ原典を示さないのは当然のことであった。（同 P.86）

と言うのは、どうして当然なのか今ひとつ納得できないところがある。

本稿は、抄物資料の「分かりにくさ」「取り扱いにくさ」について全面的に著者（坪井）の考えを述べるのではなく、その解明に至る作業の一つを実践したい。即ち、「分かりにくい」抄物資料の例として禅宗教義書の抄物のケースを取り上げ、以下にその本文例を解析することを通じてその実態を解析・報告する。

3. 講義の場（商量の場）の実態

3.1. 東京大学史料編纂所蔵本『人天眼目抄』を取り上げる理由

抄物資料の「分かりにくさ」「取り扱いにくさ」には種々の要因がある。前項で紹介した柳田 2013 の指摘する「原典本文が省略される場合」もその一つであるが、禅宗教義書を講義・講釈の対象とする抄物の場合、次のような要因が複合的に存在する。

- ① 漢詩や漢籍の講義の場合のように講師が聴講者に対して一方的に解説する方式と違い、禅宗教義書の講義の場合、その場で講師と聴聞僧の間で「問答・議論」（＝禅宗の用語で言う「商量」）が行われるケースが多く、それが記録される。
- ② また、禅宗教義書の場合、原典でも古則公案の商量が記されている場合が多い。
- ③ したがって、禅宗教義書の抄物の場合、ただでさえ分かりにくい禅語に満ちているうえに、原典に書かれていること（商量）の講師による解説なのか、講義現場で行われていること（商量）の記録なのか判然とし難いという分かりにくさが加わる。

本稿では、上記のような、抄物資料の中でも分かりにくい禅宗教義書の抄物を取り上げてその抄文の構造を解析する。具体的な解析対象としてなぜ東京大学史料編纂所蔵本『人天眼目抄』（以下、「史料本」ないし単に『人天眼目抄』と呼ぶ）を取り上げるかということ、次の理由による。

- Ⓐ 原典の『人天眼目』本文がほとんど省略せずに書かれていること。
- Ⓑ 講義におけるやりとりが比較的精細・忠実に書かれていること。
- Ⓒ 講義の行われた日時・状況・人の動作に関する情報も書かれている場合があ

ること。

要するに、複雑な構造を持ちながらも、原典と講述の関係、講義現場の状況、そこで発話された言語の実態を捉える事が可能であり、禅宗教義書の抄物が作られる現場を知ることが出来る資料であるからである。

もちろん、史料本『人天眼目抄』は、江戸初中期の書写と推定されており（中田祝夫・外山映次 抄物大系『人天眼目抄』解説 1975.6）、伝本としては一等級の資料とは言えない。また、川僧慧済の講述によるものであるが、春浦宗熙の商量が加わっているという説がある（古田紹欽『松ヶ岡文庫所蔵禅籍抄物集』解題 1976.10）。この説には著者（坪井）に否定的見解を述べた論考があり（坪井 1979）、本稿においてもその立場から記述している。

以下、史料本『人天眼目抄』から2箇所を取り出し、その本文の性質（原典『人天眼目』の本文、講師の発話、聴聞僧の発話、等）によって分け、その内容について解説を加える。

◎〔本稿で、『人天眼目抄』に記録された商量の発言者及び発言の「種類」に関して使用する用語の解説〕

講師…講義をする先生格の僧（＝師家）。『人天眼目抄』では川僧慧済。

聴聞僧…講義を聴く生徒格の僧（＝学人）。

下語〔アギョ・アゴ〕…公案や先人の法語等に対して自分の見解を述べた言葉。

著（着）語〔チャクゴ〕…「下語」と同じ。

拶語〔サツゴ〕…問題を提示し、答えを要求する言葉。

代語〔ダイゴ〕…答えるべき者に代わって見解を述べた言葉。古則公案に関して先人に代わって答える場合と、拶語に対して聴聞僧から答えが無い場合に講師自ら代わって答える場合がある。

◎〔引用部分の表記について〕

本稿では、『人天眼目抄』の引用にあたって、講釈対象本文部分、抄文部分を問わず、漢文中上付き小字は送り仮名類、下付き小字は返り点等の訓読符号を表すが、必ずしも厳密に原典の表記を再現していない場合がある。また、原典における繰り返し符号は再現せず繰り返される部分も通常の仮名に直して表示する。漢字も新字体を用いる。

3.2. 例（その1）

- ・史料本人天眼目抄 三 抄物大系 p.217~218 （論文末原本写真①参照）

〔人天眼目本文・雲門宗・三句〕○三句師示衆函蓋乾坤目機銖兩不涉世縁作麼生承當^キ衆無語 自代云一鏃破三関

【講師】師云函蓋乾坤カ一句目機銖兩カ一句不涉世縁カ一句三関ヨ目機銖兩ト云綿テモアレ何テモアレ手ノ平ニヲツトツテ是ハ五文目ソウ是ハ三文目ソウト是^カ随波逐浪タソ不涉世縁截断衆流云マテモナシト云テ

【講師（抄語）】抄云一鏃破三関時如何

《聽聞僧》有僧云中^{レハ}破^{フルト}

【講師（+代語）】師云破^{レハ}キタナイソト嫌テ代云中

〔人天眼目本文〕○円悟云本真本空一色一味非^ズ無^キニ妙体^ニ

【講師】師云空ニモアマタ有^リ頑空真空本空何^レモ真空ト見ヘテソウ雖^レ然一人発^ル真帰源十方虚空悉消殞ト云時ハ真ト空トヲ分ケラレタリ一色ト云ハ只今ノ桃花^ノ紅^ニ李花^ノ白^ニ一味ト云ハ甘草^ノ甘^ク黄連^ノ苦^クシ只今ノ色声香味触ヨ厥上^ニ妙体カアルソ

〔人天眼目本文〕非^レ無^キニ妙体^ニ不在躊躇(躊?)^ニ洞然明白ナルハ則函蓋乾坤也

【講師】師シラヘテ本真本空ト与一色一味函蓋相応シタソ不^レ在^ニ躊躇^ニチツトモトマラス洞然明白ナソサテコソ函蓋乾坤ナレ

〔人天眼目本文〕本非^レ解会^シ排量^シ将^テ来^ルニ

【講師】師云知解思量解会ヲ十丈タ、ミハヲカスソ

〔人天眼目本文〕不^レ消^ニ一字^ヲ万機頓^ニ息^クハ則截断衆流也若許^ツニ他^ニ相見^テ從^テ苗^ニ弃^レ地^ヲ

【講師】ヲク^{ツク}作^ルスル地ニハヲクワセツクラウスル地ニハワセ從^テ苗^ニ弃^レ地^ニ (***) タソ

〔人天眼目本文〕因^テ語^ニ識^ハレ人^ヲ則随波逐浪

【講師】京^ノ者ノ、物道^ヲ聞テハ京ノ者トシリ坂東ノ者ノ、物言ヲ聞テハ坂東ノ者トシルチツトモマキレヌソ

【講師（搦語）】搦云三句一句ニ道将来^レ

【講師（代語+）】代云休 此^レ上^ニ三句備有密參

（解説）史料本『人天眼目抄』第三冊の冒頭部分で、冊子冒頭に「文明四年壬辰林鐘 人天眼目三」と有る。西暦 1472 年 6 月である。第二冊の末尾に「文明四(?) 年壬辰六月五日 臨濟宗商論了」とあるので、6 月 6 日以降数日の間の講述・商量であろう。

講述・商量の対象となるのは『人天眼目』の「雲門宗」についての記述部分の冒頭「雲門三句」と呼ばれる雲門宗の宗旨を端的に表す三つの句からなる禪語についてで、その本文は次のとおり。

師（＝宗祖の雲門文偃）が大衆に向かって三つの句（＝「函蓋乾坤」「目機銖両」「不涉世縁」）を示して「どう了解するかね？」と聞いたが、誰も答える者が無かった。そこで自ら代わって「一鏃、三関を破る。」と言った。

この本文に関して、講師（＝川僧慧濟）が「函蓋乾坤が一句、目機銖両が一句、不涉世縁が一句で合わせて三関だよ。目機銖両というのは綿でも何でも手の平に取ってこれは重さが五匁です、これは三匁ですと判断する、これが随波逐浪ということだ。不涉世縁が截断衆流に対応することは言うまでも無い」と説明されて、「一鏃で三関を破る時はどうなる？」と問題を示された。それに対して商量の場にいたある僧が「命中すれば破れる」と答えた。その答に講師は『『破れる』という言葉は汚い。』と嫌われて代わりの答えとして「命中」だけとした。

次に、『人天眼目』の本文

円悟（＝円悟克勤）禪師が「本真本空、一色一味、妙体が無いわけではない」と言った。

に関して、講師は次のように述べた。「空にもたくさんある。頑空・真空・本空どれも真空に見えています。しかし、（首楞嚴經にある言葉の）〈一人真を発し源に帰すれば、十方虚空悉く皆消殞す〉と言う時は、真と空をとお分けになっている。一色というのは今現在の〈桃の花は紅く、李は白い〉ということ、一味というのは〈（生薬の）甘草は甘く、黄連は苦い〉ということ。今現在感じる色・声・香・味・触のことだ。その上に妙体があるということだ。」

次に、『人天眼目』の本文、

（円悟禪師の言葉の続き）「妙体が無いわけではない。躊躇するわけでもない。洞然として明白なのはそれがつまり函蓋乾坤（箱と蓋がぴったり合うように人によって最適な教化をすること）だ。」

に関して、講師は、吟味する口調で述べた。「本真本空と一色一味とそれぞれ函蓋相応したぞ。躊躇するのではない、少しもとどまらないで洞然明白だぞ。それでこそ函蓋乾坤だ。」

次に、『人天眼目』の本文、

（円悟禅師の言葉の続き）「もともと納得して、きちんと整えて、持って来るわけではない。」

に関して、講師は、「知解・思量・解会を徹底して重ねておくことはしないぞ。」と述べた。

次に、『人天眼目』の本文、

（円悟禅師の言葉の続き）「一字も消さないで一切の心の働きを止めるのは、それがつまり截断衆流（雑念を切断すること）だ。もし他の人に対面を許可して、苗の性質によってそれを植える土地を判断し、

に関して、講師は、「晩稲を作ろうと思う土地には晩稲を、早稲を作ろうと思う土地には早稲を、苗の違いに従って土地を選ぶぞ。」と述べた。

次に、『人天眼目』の本文、

（円悟禅師の言葉の続き）「人の話す言葉によってその人がどんな人かを知るのは、それがつまり随波逐浪（波に逆らわず随って波を追いかける）ということだ。」

に関して、（講師は）「京の者が物を言うのを聞くと（その言葉で）京の者だと分かり、坂東（＝関東）の者が物を言うのを聞くと坂東の者だと分かる。少しも間違ふことは無いぞ。」と述べた。

講師は続けて問題を示した（拶語）。「三句を一句に表現して、持って来い。」と。そして聴衆に代わって答えを示した（代語）。「休」と。

抄文では、この「代云休」の後に「此'上'三句備有密参」の文字がある。〈此'上'三句備〉と〈有密参〉の二つに分けられるが、前の〈此'上'三句備〉が、講師が代語の「休」を示した後に、聴衆のために解説というかヒントを付け足して述べた言葉なのか、聞き書きして抄を作成している者のメモなのか判然としない。後の〈有密参〉（密参有り）は、抄作成者の注記で、当日の講義・商量はここで終了して、その後個人指導ないし個人口頭試問にあたる「密参」が行われたことの記録であろう。

3.3. 例（その2）

- ・史料本人天眼目抄 三 抄物大系 p.237~238 （論文末原本写真②参照）

〔人天眼目本文・雲門宗・巴陵三句〕 ○巴陵三句 僧問如何是提婆宗 答曰銀椀裏盛雪

【講師・搦語】 搦云試弁看

《聽聞僧・着語》 有僧云狸奴白牯却知有

【講師・評語】 師云是ワヨイ着語^{トニク}

【講師・代語】 代云観音妙智慈悲力荊棘林生ニ優曇花^ヲ

〔人天眼目本文〕 ○如何是吹毛劍 答曰珊瑚枝々撐着月

【講師・搦語】 搦云如何定當

《聽聞僧・着語》 某甲云千手千眼不審^ヲ。

【講師】 師落合

〔人天眼目本文〕 ○問祖意教意是同是別 答云鷄寒上樹鴨寒下水

【講師・下語】 師呵責シテ云皆同タ別タトヲシナルサウ道テヲ道イケスト云々

【講師・語話】 語話シテ云纔日本ノ和歌ノ上^ニテタニ二条殿ノ源氏ヲ談セラルハニ招月批判シテ云源氏^ノ本体^ニナイヲアテトカアツテ式部ガ作タルヲ二条殿ノ理ヲメツタリメツタリトツケテヲシナルコンロン源氏ヲ讀ミ失ナウト^ニ。

【講師・搦語】 搦云鷄寒上樹鴨寒下水如何領會

【講師・代語】 代云使頭使下二人一時奉^フニ事^ス観音^ニ。六月十七日ヲ

〔人天眼目本文〕 雲門^{ナリ}師聞ニ此語^ヲ云他日老僧^ヲ忌辰只可^レ舉此三転語報恩足^ル矣

【講師・下語（+動作）】 師云今日老僧於観音前^ニニ^テ三転語^ヲ報恩足矣ト云テ 聞訊^{シテ}飯方丈

（解説） 前の（その1）で取り上げた史料本『人天眼目抄』第三冊の冒頭部分から暫く後の部分（抄物大系のページ数で 18 ページを間に挟んでいる）で、当日分の講義・商量の最後の講師の代語に付記された月日、及び代語の内容やその他の講師の言動でも分かるように 6 月 17 日観音諷経を控えた日の講義・商量である。

講述・商量の対象となるのは引き続き「雲門宗」についての『人天眼目』の記述部分であるが、「雲門三句」ではなく「巴陵三句」である。本文は次のとおり。

巴陵三句 ある僧が巴陵（雲門の法嗣）に提婆宗というのはどういうものだと尋ねた。巴陵が答えた。「銀椀の中に雪を盛る」と。

これに関して、講師と聴聞僧の間で次のようなやりとりが行われた。

まず、講師が問題を示して（拶語）「試しに見解を述べてみる。見てあげよう。」
と言ひ、聴聞僧の一人が「狸奴・白牯、却って有るを知る」（『碧巖録』六十一則「三世諸佛不知有、狸奴白牯却知有」の後半の句を引いたもの）と答えたところ、講師は「これは良い解答だ。」などと述べ、講師自らも次の解答を示した（代語）。「観音の妙智・慈悲力、荊蕪の林に優曇花を生ずる。」

次に、『人天眼目』の本文、

（僧の質問）「どういふものか、吹毛の剣とは。」巴陵が答えた。「珊瑚の枝々が月を支える。」と。

に関して、講師と聴聞僧の間で次のようなやりとりが行われた。

講師が問題を示して（拶語）「何と理解するか？」と言ひ、聴聞僧の某人が「千手千眼不審不審」（『臨濟録』に基づく語。この場合「不審」は、安否を問う挨拶語。）と答えたところ、講師は落合した（？「同意する」「納得する」の意か？「落ち合う」と読むべきか？）。

次に、『人天眼目』の本文、

（僧の質問）「達磨の教えと釈迦の教えは同じか別か？」巴陵の答えは「鶏は寒いと木に登り、鴨は寒いと水面に下りる。」

に関して、講師は聴衆を責め立てて「皆、同じだ別だとおっしゃる。そう区別だてして言つては大事なところを言い消してしまう。」などと述べた。次いで講師は聴衆に次のような話を披露した。

ちょっとした日本の和歌に関する話の上でも、二条殿（具体的に誰を指すか不明。二条良基か？ただし、正徹と時代が違い、「源氏物語の談義」についても不明）が源氏物語を講義なさるのを招月（＝清巖正徹）が批判して言うには、「源氏物語というのは本当のこともないことを何か目指すところがあって紫式部が作ったのを、二条殿が理屈をめったりめったりとつけて解釈をされる。すっかり源氏物語を読み損ねてしまうものだ」などと（講師は語られた）。

次いで、講師はこう質問を投げかけた（拶語）。「鶏寒上樹鴨寒下水ということをどう了解するかね？」そして、聴衆に代わって答えた（代語）。「使頭・使下（？）二人が同時に観音にお仕えする」と。

なお、この講師の代語の下に小字で「六月十七日ナリ」という注記があるが、これはこの講義・商量が行われた日付で、講師の代語が観音諷経に因んだ代語であることを示すものでもある。

次に、『人天眼目』の本文、

雲門（である）師が此の巴陵の言葉を聞いて言った。「後日、老僧（＝自分。雲門のこと）の命日には、ただ此の三つの転語（＝巴陵の三句）を唱えてくれ。それだけで私に対する報恩供養は十分だ。」

に関して、講師は「今日、老僧（＝自分。川僧慧済のこと）観音様の御前で三転語を示した。これで報恩は十分だ」と言って、問訊して（＝合掌低頭の挨拶をして）方丈（＝講師の自室）に帰った。

4. （付説）仮名抄の「口語性」の淵源について

以上、抄物資料の「分かりにくさ」について、分かりにくい抄物の代表として、禅宗教義書の抄物で、講義の場での商量の記録を伴うものとして史料本『人天眼目抄』を取り上げ、その抄文本文の構造解説を行い、「分かりにくさ」の実態を解析した。

本稿の最後に、このような「分かりにくさ」を持ちながら、中世日本語の「口語」資料として抄物資料が珍重される所以であるその「口語性」について考えるところを記したい。

抄物資料の「口語体」について、野村 2007 は次のように言う。

- ・大抵「抄物」は（江戸期の「国字解」もそうですが）、講述者（先生）が受講者（弟子）たちに講義をし、それを聞き書きしたものという体裁を取ります。講義ですから、「口語体」になるのです。（p.139）

また、野村 2011 でも、

- ・（抄物が）口語体で綴られているのも、わかりやすさを眼目とした講義の結果と考えることができよう。（p.176）

と述べ、抄物の口語体の源泉を「講義」の存在に求めている。ただし、その口語体は、

- ・しかし、先生の講義をそのまま丸書きすることはなかなか困難でしょうから、後に「講義録」としてまとめあげたり、場合によっては初めから先生が「抄物」を作っておいた、ということもあったようです。とすれば「抄物」は「口語体」の書き言葉ということにもなるのです。（野村 2007 p.139 *先に引用した部分の数行後の部分）

と述べるように、「音声言語」の忠実な聞き取りではなく、「書き言葉」として様式化されたものであるとする。

柳田 2013 は、第 2 節で述べたように、正面から抄物資料の口語性を取り上げ、膨大な抄物資料の詳細な観察に基づいてその「口語文体」の成立を論じたものであり、その内容を軽々にまとめることは出来ないが、終助詞づで終わる仮名抄の口語文体が桃源瑞仙の仮名抄作成時期に確立したと見ていられる。

知識の乏しい本稿筆者は、柳田 2013 に指摘され論じられていることに基本的に同意すると言うよりも、只々教えられる他ない者であるが、ただ、抄物の「口語性」の由来、「口語体」で抄文を書くようになる必然性は、以下のようなことにも有るのではないかと思う。

仮名抄で成立の古いものと言えば、応永二十七年本『論語抄』（1420 以前成立）や江西龍派講『杜詩統翠抄』（1439 頃成立）のような漢籍・漢詩文の抄物が挙げられるが、『禪宗無門関』『碧巖録』『臨濟録』『人天眼目』のような禅宗教義書の類の講義も古くから行われ、その抄物も作られていたのではないかと思われる。柳田 2013 でも、桃源瑞仙以前の古い「仮名交じり口語体」の抄文を含む可能性を持つ抄物として、『碧巖録』の抄物『木杯余瀝』など数種の禅宗教義書抄物の名前が挙げられている（p.62）。

禅宗教義書には、古則公案に関する中国禅僧の問答が載っている。そして、これら禅宗教義書の講述の場では、本稿で観察した『人天眼目抄』のように、その場の講師や聴聞僧の間でも商量が行われ、そのやりとり自体が抄物の記述内容となる。その場合、そのやりとりを記録する言語はどのような言語がふさわしいと当時の日本の禅僧たちに感じられたであろうか？彼らが講義の対象（教科書ないし教材）とした教義書には中国禅僧の問答が、古代中国語を基にした古典文体と違った白話文体で書かれている。そして禅宗においては単に話の内容が重要なのではなく、発話の際の勢いや口調、応答の間合いまでが重要な意味を持つ。したがって、その禅宗教義書記載のやりとりを解説する際も、また、講述の場で自分たちが行う言葉のやりとりも、古臭い漢文訓読体や古文体ではなく、生々しい口語体による記録が求められたのではないだろうか？

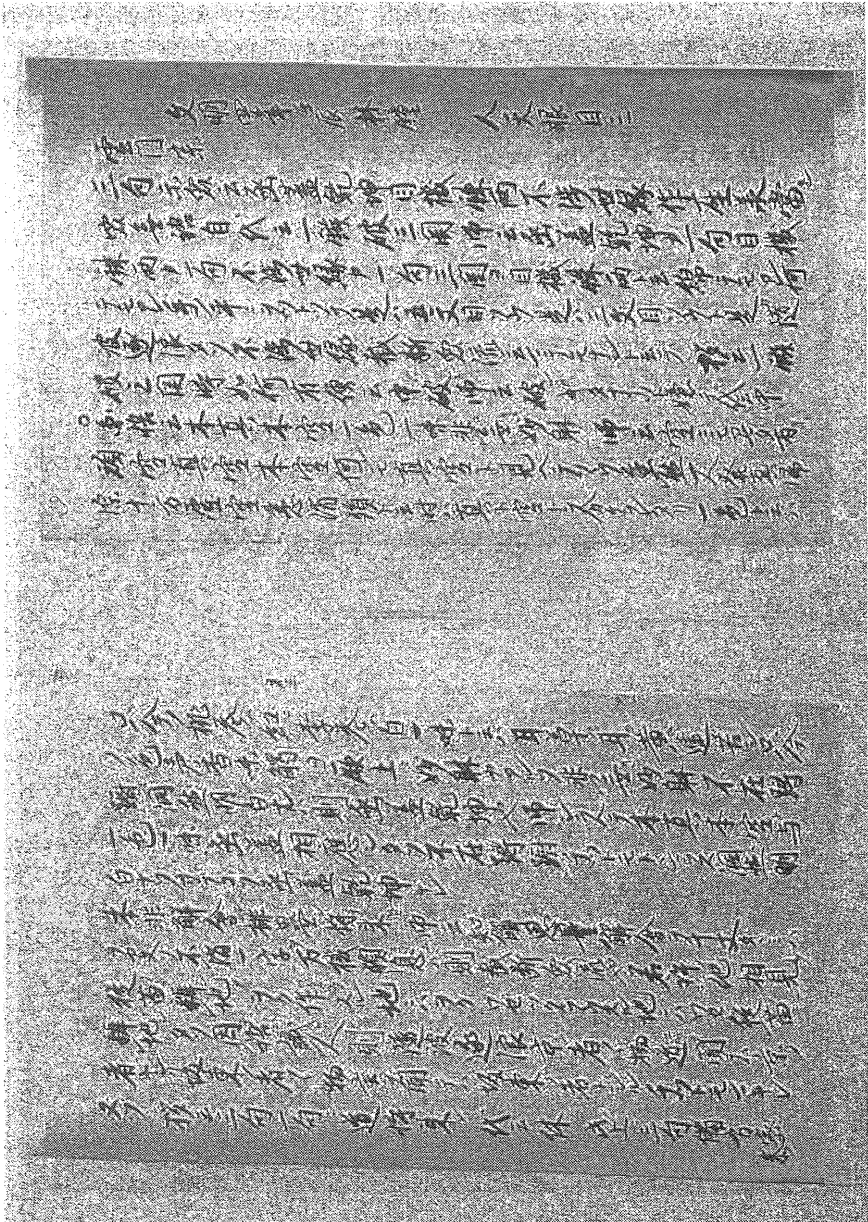
つまり、これは実証を伴わない著者（坪井）の推測に過ぎないが、仮名抄の口語体の淵源の一つとして（仮名抄の口語文体が生まれる要因は単一ではなく、複数あ

るとも考える)、禅宗教義書の講述現場のあり方とその記録としての禅宗教義書抄物の成立にあるのではないかと考えるのである。このことはいずれ稿を改めて詳しく論じたい。

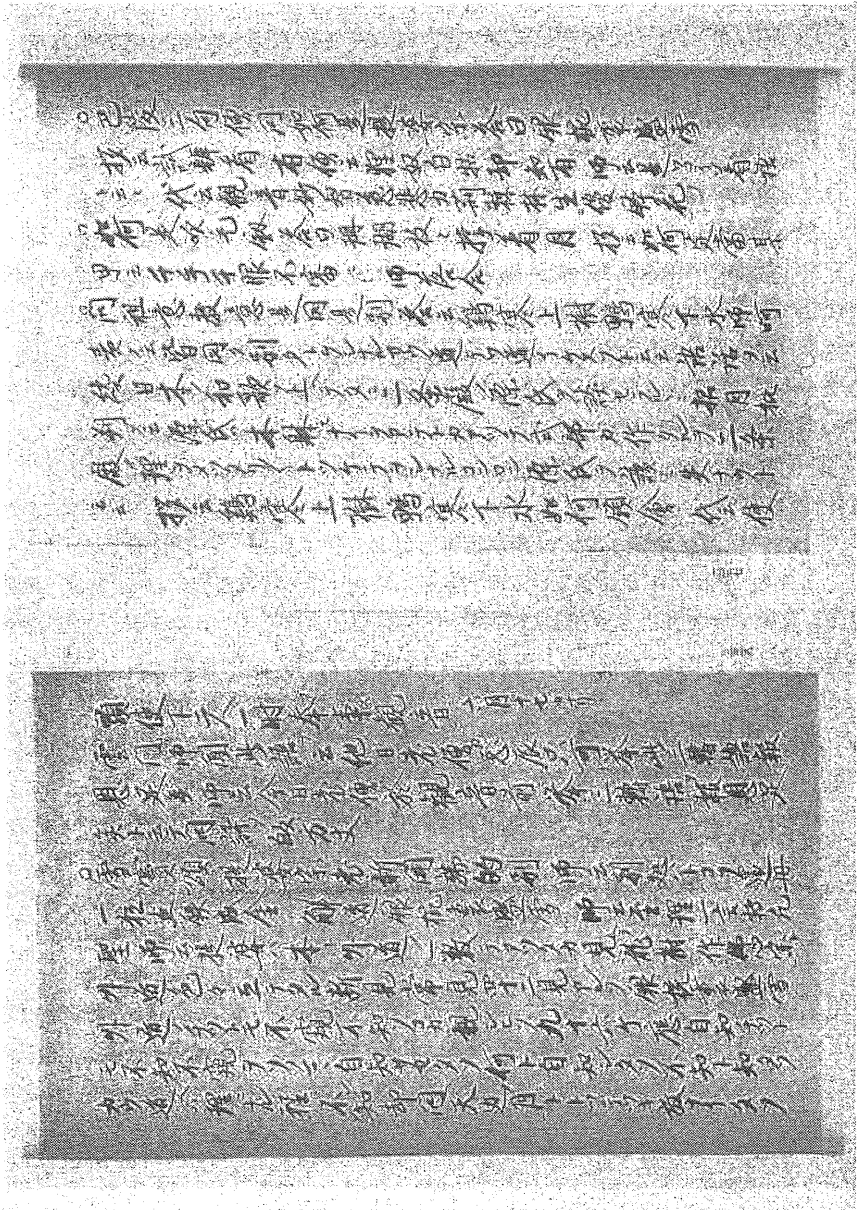
参考文献

- 近藤 2006 近藤章正「曹洞宗教団史の一考察」『印度学仏教学研究』第 55 卷 1 号
日本印度学仏教学会 2006.12
- 坪井 1979 坪井美樹「人天眼目抄三本私見—内部徴証から史料本と足利本・松岡本との関係を考える—」『千葉大学教育学部研究紀要』第 28 卷第 1 部
1979.12
- 2012 坪井美樹「抄物資料におけるオノマトペの役割」『文芸言語研究 言語篇』61 号 筑波大学人文社会科学研究所文芸・言語専攻 2012.3
- 中田・外山 1975 中田祝夫・外山映次 抄物大系『人天眼目抄』解説 1975.6.
- 野村 2007 野村剛史「抄物」の世界—室町時代の言語生活」東京大学教養学部国文・漢文学部会編『古典日本語の世界 漢字がつくる日本』東京大学出版会 2007.4
- 2011 野村剛史『話し言葉の日本史』2011.1 歴史文化ライブラリー 311 吉川弘文館 2011.1
- 2013 野村剛史『日本語スタンダードの歴史 ミヤコ言葉から言文一致まで』岩波書店 2013.5
- 古田 1976a 古田紹欽『松ヶ岡文庫所蔵禅籍抄物集』解題 1976.10
- 1976b 古田紹欽「川僧慧濟について」『禅研究所紀要』第 6,7 合併号 愛知学院大学 1976.12
- 柳田 2012 柳田征司『日本語の歴史 3 中世口語資料を読む』武蔵野書院 2012.5
- 2013 柳田征司『日本語の歴史 4 抄物、広大な沃野』武蔵野書院 2013.4
- * 本稿中の東京大学史料編纂所蔵本『人天眼目抄』本文は、中田祝夫編抄物大系『人天眼目抄』(勉誠社 1975.6) に拠った。

（原本写真①）史料本『人天眼目抄』 三 抄物大系 二二七〜二二八頁



(原本写真②) 史料本『人天眼目抄』 三 抄物大系 二二七〜二三八頁 (四行目
まで)



抄物が生まれる現場（商量を伴う場合）（坪井美樹）

[付記]本稿は平成 25 年度科学研究費補助金（基盤研究 C）「日本語史研究における抄物資料の活用促進のための研究」の成果の一部である。

つぼい よしき／人文社会系教授
(2013 年 10 月 31 日 受理)